

ぼくの
おばあちゃん

中川なをみ作

木村ひさえ絵



ゴールデンウィークのあとの金曜日、学校から帰ったぼくを、玄関でむかえてくれたのはおばあちゃんだった。父さんのお母さんでもある大阪のおばあちゃんは、ぼくの家によく遊びに来る。働いている母さんのかわりに、病気になるったぼくの世話をしてくれたこともあった。

おばあちゃんは家の鍵を持っているから、いつでも好きな時に、家の中に入れる。

「おかえり、圭ちゃん。元気やった？」

「は、はい」

ぼくの目の前は、まっかっかだ。

おばあちゃんは真っ赤なワンピースをきて、下にはテカテカ光る紺色のパンツをはいていた。ワンピースのすそとそでにはフリルがあつて、おばあちゃんが動いた時にヒラ

ヒラゆれる。若い人が着るような華やかなドレスだ。見ていただけではずかしくて、顔がかっかとおぼえてくる。

うつむいてだまっているぼくをみて、おばあちゃんが、クッと小さく笑った。

「圭ちゃん、もしかして、私のファッションに驚いてるの？」

ぼくはちょっとだけうなずいた。

「ねえ、この赤、わたしにおうてるでしょ？」

「わからないよ……なんていうか……」

おばあちゃんがしゃがみこんで、うつむいたぼくの目をみつめた。

「圭ちゃんに会うから、目いっぱいおしやれしてきたんだよ。こんなん、だめ？ おかしいなんて、いわんとってよ。おばあちゃん、悲しゅうなるわ」